慶應義塾医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話番号(03)3353-1211(大代表)
信濃町駅前・各種診療

共立薬科大学との合併に向け協議始まる

【2006年11月20日発表】

二〇〇八年四月を目標に
双方の歴史と現状を尊重して

すでに報道されている通り、学校法人共立薬科大学から慶應義塾への合併の申し入れがあったことから、義塾では合併を前提とした協議の開始について、去る十一月十五日の理事会、ならびに同二十日の評議員会において正式にこれが承認された。合併に関しては、共立薬科大学からの非公式な打診が、二〇〇五年十月にあって以来、義塾で慎重に討議してきたが、双方において今後の未来が期待できるという委員会および義塾の一致した合意から、今後は公開の場において、ともに伝統と歴史を持つ学校法人の合併に伴う諸般の課題について詳細な検討を行っていく予定としている。

今後のプロセスとして、両法人による協議推進のための組織「両法人合併推進委員会（仮称）」を立ち上げ、これに伴い、両法人による「両法人合併推進本部（仮称）」を設置し、本部には、薬学部等と医学部等の両サイドから連携を視野に、薬学および関連分野の未来の発展、社会貢献に大きな期待ができるものと思う」と、その期待感を表した。

奇しくも創立一五〇年と一〇七年三月を目途として協定書の原案作成等にとりかかる。予定通りに合併協定が締結された場合には、薬学部および大学院薬学研究科十分ほどに位置する。創立者の小島晃氏は義塾経済学部の出身、また、鎌倉芝浦校舎は、芝校舎と同じく創立一五〇年と一〇年に創立。拠点となる神奈川の通り三田キャンパスから徒歩二バスは現在、芝校舎と浦和校舎。卒業生数累計は約一万三千名。

●共立薬科大学：私立の薬科大学として一九八〇年に創立。拠点となる鶴ヶ岳周辺の三毅塾元塾長が創立当時顧問を務めている。キャンパスは現在、芝校舎と浦和校舎。卒業生数累計は約一万三千名。

2006年11月20日の合同記者会見にて。写真右より、望月正隆共立薬科大学学長、橋本嘉幸同理事長、安西祐一郎慶應義塾長、西村太良同常任理事

大学病院における画像ネットワーク構築とフィルムレス化

放射線科学　教授
画像ネットワーク構築・フィルムレス化委員会委員長　栗林　幸夫

大学病院では、臨床業務の効率化・近代化の一環としてフィルムレス化を前提とした画像ネットワークの構築に関する事業を進めている。事業全体三期から構成され、三年計画で昨年四月からスタートしている（表）。近年における高度化を、医療情報の電子化は、診療の効率化と質の向上に必須であり、相川病院長のご指示のもと、各診療科、中央診療部門、事務、技術、看護部門の代表者からなる画像ネットワーク機器・フィルムレス化委員会を主体に事業を進めている。本事業は、病院の近代化へ向けてのまさにリノベーションといえる大事業であり、医学部新聞のこの欄において紹介させて頂くことになりました。

1. 画像ネットワーク導入の背景と目的

大学病院では、外来患者数約4,000人/日、入院患者数約1,000人規模の診療が行われているが、これに伴って年間10テラバイト以上の膨大な画像データ（CT、MRI、超音波、単純エックス線および造影検査など）が発生しており、マルチスライスCTに代表されるように画像情報の質の向上と、情報量は飛躍的に増大、毎年10～20％増加している。現状では、フィルムに焼き付けられて臨床に供されているが、個々のデータは診療科別に管理されており、患者を中心に管理されておらず、患者の検査歴をワンクリックすることで、瞬時に過去画像を参照できるので、診療効率が向上するとともに、検査の重複を避けることができる。あわせてフィルム等は、院内で発生する上記の医用画像を標準プロトコルに基づき電子的に保存し利用可能とするPACS（Picture Archive and Communication System）を導入し、データベース化・共有化をはかることで、診療業務効率の改善を図るものである。これにより、1患者、1画像フォルダー」のコンセプトのもとで、患者さんの全ての画像情報を時系列的に一元管理することができ、患者さん中心の診療が可能となる。同じ患者さんがどの診療科を受診しても、モニター画面上の画像履歴をワンクリックすることで、瞬時に過去画像を参照できるので、診療効率が向上するとともに、検査の重複を避けることができる。あわせてフィルム等のハードコピー利用を段階的に廃止して、年間二億円を超えるフィルム購入費用、運搬、保存など関連するコストを削減すること、さらにフィルムレス化後のPACS加算により、病院収支の改善に寄与するものと思われる。

2. 画像ネットワークの概要

画像診断装置から発生する情報のほとんどはデジタル化されており、また国際的な医用画像の保存と通信に関する規格であるDICOM（Ⅲ-2面続く）

信濃町リノベーション

〈第10章〉

第八十六回 慶應医学会開催

比企能樹三四会長より栄えある三四会賞励賞を授賞される受賞者

第八十六回慶應医学会総会が平成十八年十一月十日（金）の午後三時より、慶應義塾大学病院新棟十一階大会議室において開催された。

相模貞和慶應医学会副会長の開会の挨拶があり、まず戸山芳昭理事より平成十七年度及び十八年度の庶務報告が行われた。

平成十七年度には七名の、十八年度には七名の会員がご逝去なられ、黙祷が捧げられた。

つづいて岡田保典理事より平成十七年度決算の報告があり、平成十八年度の中間決算の報告があり、平成十八年度の会費収入と慶應医学の掲載料収入の減については、それぞれ会員管理ソフトにそのデータ管理の関係上学位申請論文の減少によるものとの説明がなされた。鹿島晴雄監事より監査報告があり、決算は承認された。

また相磯副会長より平成十八年度の事業計画の、また岡田理事より平成十七年度予算案の説明があり、いずれも承認された。

総会に引き続き、三四会賞励賞授与式が行われ、比企能樹三四会長より選考結果が述べられ、十二名の受賞者に比企会長より賞状と副賞が授与された。受賞者は、臨床医学分野五名、基礎医学分野五名、社会貢献等一名であり、今後の益々の活躍が期待される。

鹿島晴雄（教授　精　49回）

総会に続くシンポジウムでは活発な意見交換も

シンポジウムは、病院としての安全対策と危機管理」と題して、「戸山芳昭、外科66回、上村和子厚生労働省大臣官房参事官（健康・医療担当）、ハードコピー利用を段階的に廃止して、年間二億円を超えるフィルム購入費用、運搬、保存など関連するコストを削減すること、さらにフィルムレス化後のPACS加算により、病院収支の改善に寄与するものと思われる。」と述べた。

シンポジウムで講演する古川俊治氏（上）と、上村和子氏（下）

長、5名がシンポジストとして講演を行った。

古川氏が、「異状死の届出義務と医療従事者の刑事責任について」と題して、異状死の届出問題をめぐる議論と実務の状況、及び医療従事者に対する刑事責任の厳罰化傾向について、現在法制度の問題点と改正の必要性について指摘した。

上村氏は、「診療行為に関連した死亡の調査分析モデル事業について」と題して、近年の厚生労働省による医療安全対策への取り組みの概要の説明に続き、現在諸学会と連携して行われている死因解明のためのモデル事業のこれまでの運営状況について報告した。

落合氏は、「私立大学病院医療安全推進連絡会議について」と題して、現在進められている私立大学病院間の医療安全対策に対する外部評価制度について解説した。

後藤氏は、「緊急時の情報リスクマネージメント」と題して、「医療事故発生時の組織内部での情報収集と伝達の方法」、また、組織外部への情報の開示、公開及びマスコミ対応について解説した。

各シンポジストの講演に対して会場から多数の質問がなされ、このテーマに対する関心の高さがうかがわれた。

会場からも多数の質疑がなされた

関連病院会 秋季総会 開催

平成十八年十一月二十八日、慶應義塾大学病院の五百五十名余り、五十五名の出席のもとで、慶應義塾大学関連病院会秋季総会が新棟十一階大会議室で行われた。副会長の東京原医療センター松本純夫病院長の司会で進められ、水野嘉夫会長による挨拶があり、続いて医務報告がなされた。

その後、池田康夫医学部長による「大学医学部の現状と将来構想」についての説明が行われた。それに先立ち、共立薬科大学との合併について説明され、続いて慶應病院を主題とした専修医百九十三名のほっかっこがなされ、報告された。そして、研究成果が臨床に反映される医療の仕組みを作っていくことの必要性、診療部における「メディカル・ルリサーチセンター」の形成、予防クラスターの形成、クリニカルリサーチセンターなど（他）教授、中川教授、岡本助教授のみがであった。

今回も総会への参加内から出席者は、池田医学部長、相川病院長、小川医学部長、百四十人の大学院生、五百人の研修医を受けられている。昨年度より新カリキュラムを導入し、二〇一〇年には新教育研究棟の設立が予定されている。

関連病院との関連を強調する「つづいて特別講演として、国立保健医療科学院の篠崎英夫院長（48回）により「関連病院の由来と展望」というテーマで、かつてどうして関連病院が全国にあったのかの理由や、関連病院についての現状と今後、さらに医療保険制度、研修医制度と幅広い内容の講演がなされた。その後、オアシスにて、相川病院長の乾杯の後、懇親会が行われた。

今回も総会への参加内から出席者は、池田医学部長、相川病院長、小川医学部長、百四十人の大学院生、五百人の研修医の教職員と三つの付属病院を有し、七百二十人の医学部生、百四十人の大学院生、五百人の研修医を受けられている。昨年度より新カリキュラムを導入し、二〇一〇年には新教育研究棟の設立が予定されている。

水野嘉夫（内47回）

テンプル大学医学部との学術交流協定を締結

二〇〇六年十一月十三日、医学部は慶應病院キャンパスにおいて米国のテンプル大学医学部との学術交流協定を締結、調印式にはテンプル大学医学部からJohn M. Daly医学部長、Christopher M. Lattus教授が出席。池田医学部長、武田医学部長、河瀬教授が出席した。

今回の協定締結は、脳神経外科を専門とする河瀬教授とLattus教授が両校のリエゾンとなり実現にこぎつけた。今後、具体的な流の可能性について検討していく予定。

テンプル大学医学部（Temple University School of Medicine）は、ペンシルバニア州フィラデルフィアにある一九〇一年の創立。二千三百人の教職員と三つの付属病院を有し、七百二十人の医学部生、百四十人の大学院生、五百人の研修医を受けられている。昨年度より新カリキュラムを導入し、二〇一〇年には新教育研究棟の設立が予定されている。

山田祥岳　君（放射線科助手　81回）
人命救助にてBLS委員会より表彰

去る九月二十四日、さいたま市桜区の荒川総合運動公園サッカー場で社会人サッカーの試合中、グラウンドでプレーしていた男性（26歳）が突然倒れた。

チームメートで放射線科の山田祥岳君（81回）が直ちに駆けつけ様子を見たところ、男性は意識がなく、心肺停止状態であった。

現在、容体は回復し後遺症もないという。

さいたま市救急課は「すばやい判断と適切な手当で助かった模範的な事例」と評価しており、さいたま市救急課、本人及び家族より感謝の電話が寄せられた。

この功績を讃えられ、山田君は十一月二十八日、慶應義塾BLS委員会（BASIC LIFE SUPPO）より表彰された。

山田君は内科のベストレジデントとして表彰されたこともあり、内科での研修、経験が役に立ったとしている。

久保智司教授　放47回

【関連記事6面】

ピーター・アグレ教授
慶應義塾大学名誉博士号授与

十一月一日、慶應医学賞授賞式の直前に北里講堂にてピーター・アグレ教授（米国デューク大学）に対する慶應義塾大学名誉博士号授与式典が開催された。

アグレ教授は、水チャネル、アクアポリンの発見に対して二〇〇三年度ノーベル化学賞を受賞している。細胞の膜に水を通す特別な穴が存在することは約一世紀も前からいわれていたが、アグリ教授のアクアポリンの発見までその実態が明らかとなり、その後水分調節、分泌・吸収に対する我々の理解を急速に深めることとなった。

アクアポリン研究は、その汎用性・重要性から様々な分野で発展しつつある。腎医学部においても医化学、薬理学等の基礎教室から内科学、眼科学および臨床教室に至るまで実践されている。

アクアポリン研究は、考委員長、クリスチャン・プロバイガー助教授を迎えて、「医学教育の将来構想に関して」というテーマでパネル討論会が開催された。慶應からは医学部生の安川康介君（六年生）、石井美穂さん（五年生）、そして末松誠教授（医化学）、岡野ジェームス洋尚助教授（生理学）がパネリストとして参加した。また、特別講師として東大医化学研究所の師子柴史雄教授も参加された。

十一月三日には、このノーベル化学賞受賞者、カロリンスカ研究所からアニタ・アルバイン教授（元ノーベル医学賞選考委員長、クリスチャン・プロバイガー助教授を迎えて、「医学教育の将来構想に関して」というテーマでパネル討論会が開催された。慶應からは医学部生の安川康介君（六年生）、石井美穂さん（五年生）、そして末松誠教授（医化学）、岡野ジェームス洋尚助教授（生理学）がパネリストとして参加した。また、特別講師として東大医化学研究所の師子柴史雄教授も参加された。

この度の名誉博士号授与でアグレ教授と慶應の関係が益々深まり、様々なレベルで両大学間の交流が促進されることが望まれる。

パネル会議「医学教育の将来構想に関して」開催

十一月十五日に、慶應医学部の教職員、学生、教員を始め約百名の参加があった。

【関連記事6面】